夜のコンビニに幼子は似合わない

choco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜のコンビニに幼子は似合わない

【Ｎコード】
Ｎ５６５５Ａ

【作者名】
ｃｈｏｃｏ

【あらすじ】
毎日夜のコンビニにデザートを買いに来る晶子と、彼女をママと間違えた『おおのりゅうたろう』、そして龍太郎のパパであり、本当のママに逃げられた啓介。コンビニの白蛍光灯の下で始まった、とても愛らしいお話。※０の付く日（時間不定）に更新します※度々申し訳ありません。しばらく夏ホラーに専念します※

第一話：私はあなたのママじゃない

夜のコンビニは、『生臭い現実世界』であると同時に、彼女にとって『異世界』だ。晶子は駅前の通りを一つ入り、その異世界へ向かう。

外から中を見るときよりも、中から窓越しに外を見るとき、晶子はそれをより強く感じる。疎らに雑誌の並べられたラックの後ろに見える外は、都下らしくほとんど真っ暗で、こちら側の蛍光灯は、そしてこちら側の壁は、どこまでも真っ白だ。外の黒さは、それが全く自然のものであることを主張し、こちらの白さは、それが全く人工的なものであることを露呈している。

晶子は毎夜、あるひたすら現実的な目的を果たすために、この異世界へやってくる。仕事疲れを淑やかに癒す、甘いデザートを買うために。

晶子は酒が飲めないわけではない。しかし晶子にとって酒といえば『ストレス解消の手段』というよりもむしろ『仕事の一環』だ。酒といえば職場の人間に誘われて飲むことがほとんどであったし、いざ飲みに行けば、同僚に愚痴を聞かされるか、そうでなければやたらと騒がれるかで、かえって疲れやストレスが溜まる一方であった。

このように酒にあまり良い思い出のない彼女にとって、仕事の疲れを癒すものといえば、ただ一つ、甘いものだけなのだ。

サンドイッチやお弁当の隣り、おつまみの下、晶子は中腰になってその棚を覗き込む。ショートケーキ、シュークリーム、それからエクレア。それぞれに二三種類のヴァリエーションがあるくらいで、決して豊富な品揃えとはいえないが、――生クリーム好きの晶子の目には、隣りにあるゼリーやプリンなど見えていないのだ――晶子

にとってはこれで十分だった。コンビニのデザートくらいの贅沢が、自分には丁度いいのだと思っていた。
晶子は二分ほど、それぞれの成分表示を見たり、食べるところを想像したりしながら迷い、結局まるごとバナナを手に取った。それから明日の朝食用にとミックスサンドをつまみあげて、レジへ向かう前に店内を一巡りする。――これは彼女の癖のようなものだ。中身は完璧に分かっているはずの自宅の冷蔵庫を、目的もなく開けてしまうのに似ている――
店の端から端、全ての棚の間をくまなく、何を見るでもなく歩く。チョコやポテトチップスのある通路を抜け、缶ビールの目の前に来た辺りで、
「パパハイチュウ買ってー」
四歳くらいだろうか、少年の声が聞こえた。
今日は父子家庭？
声のした方を振り返り、息子がパパの手を引いているのを確認すると晶子は、その少年に母親がいないことを直感した。平日の夜コンビニに来る小さな子供、七割は『訳あり』だ。『共働き』くらいのちょっとした事情から、『馬鹿親』『片親』『夫婦喧嘩の巻き添え』などなど。
そんな事を感覚的に知っている晶子は『夜のコンビニと幼子』というマッチングがあまり好きではなかった。でも同時に、コンビニという『なんでもやさん』を無邪気に楽しみ、自分の家庭の特別な事情など気にもしていないような幼子の声は、朧気な明るさを切り取ったようなこの異世界に、なかなか調和している、とも思うのだった。
「よっしゃー！」
再び響いた少年のたどたどしい声に、晶子は再び振り返る。　柔らかそうな髪の少年だった。同じく柔らかそうなジーンズを穿き、ベージュ色の、ポケットのたくさん付いたジャケットを羽織っている。
その少年の腰に大きな二本の手が伸び、少年を軽々と持ち上げた。

少年をひょいと肩に乗せたその手の主――恐らくは『パパ』であろう――は、『大きな』男だった。
身長百六十センチ前後の晶子よりも、頭一つは高いであろう身長。擦り切れたジーンズと、大きめのスウェット越しにもそれなりに筋肉がついているのが分かる（息子もその肩の上に安心して乗っているようだ）。角刈りが伸びたようなヘアスタイルの黒髪と、その下の太い眉。大きくて力のある、でもどこか悲しげな眼。
晶子は再び向き直り、視線を少し左にずらした。遠くでレジの大学生の威勢のよい声が、お買い上げは一点で百五円であることを告げていた。
「なーんか最近変な形のばっか」炭酸飲料やお茶のボトルを眺め、晶子は一人ごつ。
そして、実はそんなこと、どうだっていいといった風に、カップ麺やレトルトカレーの並ぶ通路にふらと向かった。
晶子はカップヌードルに良く似たものを見つけ、それを手に取った。そして、それがカップヌードルと同じく日清から出ていることに気付いた。晶子がその事実に少しだけがっかりしていると、レジの方から小銭がばらまかれる音が、そしてややあって、
「ママいた！」
少し予想外の声がした。

へえ、ママいたんだ……。
晶子が、じゃあ共働きかな、などと思いつつ、手に取っていたヌードルを棚に戻していると、腿の辺りに暖かな、それでいて重いものが当った。
晶子の腿には、『ママ』を見つけたあの少年が、しっかりと頬を擦りつけて抱き付いていた。

第二話：あなたのおうちはどこですか？

「んーボク、どうしたー？」
「ママおかえりー」
その少年は晶子にぴったりとくっついて離れない。晶子のタイトなパンツをしわだらけにし、手の中のハイチュウも押しつぶすくらいの強い力で抱き付いている。まさか。晶子は、その少年の誤解を解く。
「ごめんねー、おねーさん、ボクのママじゃないんだー」
少年は晶子に抱き付いたまま顔を上げた。晶子と目が合うと、しばらくそのままの状態でじっと晶子を見据えて――泣きだしてしまった。その少年は、晶子の腿にしっかりとしがみつき、時折涙にまみれた顔を腿に埋めて、大声で泣いた。果たして、ママじゃないと分かっているのかいないのか、晶子が頭を撫でて慰めようとすると、少年はその手を振り払って、それでもやはり晶子の腿にしっかりとしがみついたままわんわんと泣いた。
　晶子はすっかり困り果てていた。泣いている子供にただ泣かせるしかできないのは、晶子にとって非常にもどかしかった。でもやはりどうしようもない晶子にとって、そしてこの子供にとって、この状況でただ一人頼りになる人、それはあの男、この子供の親だ。
「龍ー……あー、えっ？　あ……どうも」
やっと小銭を拾い終えたのであろう男がようやく現れ、驚いた、というよりもぽかんとした顔を見せた。確かに、いきなり、ママいた！　と走っていった息子が、気付けば知らない女にしがみついて泣いている上に、そのママの姿がどこにも見当たらないとなれば、そうなってしまうのも当然だ。あーあ、私が泣かせたみたい、晶子はそう思いつつ、あ、どうもごめんなさい、と頭を軽く下げた。
「いえいえ、すいませんこちらこそ。どうせうちの馬鹿がぶつかったか何かでしょう？」

男はそう言って、ああほらほら泣くな泣くな、と息子を晶子から引き離し、どーした？　と聞いた。息子は、ママが……と一つ言っては泣き、おねーさんが、と一つ言っては泣いた。
「で……こいつ何したんです？」
わかったわかった、と息子を胸の中であやしながら、男が聞いた。
「いや……はは、まあ、何といいますか」
「ははは。あ、そういえば、尚子、見てません？　こいつのママなんですけど」
まるで『こいつのママだけど自分の妻ではない』といった風だった。
「あ、いや、あの……ですね」
晶子は男に事の顛末を話した。男はそれを聞き終えると、あー、と声を挙げて
「あなた何っとなく面影ありますもん」
と一人頷いた。
「似てるんですか？　私」
「いや、似て……はないですね」
あはは、と笑いながら晶子は男の腕の中を見た。少年はいつの間にか機嫌をなおしていたらしく、今度は眠そうにうつらうつらしていた。晶子が、ごめんねー、と少年を撫でると、少年の口角が少しだけ上がった。
「かわいいですね、名前は何ていうんですか？」
「あ、えーっと、ちょっと待って下さいね」
それだけ言うと男は息子をゆすり、おなまえは？　と聞いた。すると息子は小さな声で、
「おおのりゅうたろうです、さんさいです」
と答えた。
「ああーすごいねー」
「ほら龍、おねーさんがすごいって」
すると息子は父ににこっ、と笑って見せた。
「えーでも、三歳なんですか？」

おっきく見えますね、と晶子が関心していると、男は、メシだけは一人前に食いますからね、と笑った。

「あ、もう寝ちゃいました？」
「みたいですね、もう夜だし、わんわん泣いてやがったし」
龍はほんの少しだけいびきを書いて、すやすやと眠っている。おうち帰んなきゃねー、と晶子が龍に話しかけていると、男は
「あ、せっかくですし、うち来ません？」
と言った。
「えっ？」
「いやこれも何かの縁でしょう？」
「まあ、そうですね。じゃあ、お言葉に甘えて」

第三話：私はいけないおねえさんです

古びてはいるが頑丈そうな造りのアパートの二〇三号室、部屋のほとんどを占めるダイニングキッチンで、晶子は激しく後悔していた。

たやすく『男の部屋』に呼ばれるべきではなかった、と。

今現在まだ何も起きてはいないとはいえ、晶子は今、一旦男が妙な気を起こせば逆らうに逆らえない、むしろ晶子がそれを望んでいると思われても仕方のない環境にいるのだ。頼みの綱の龍は既に夢の中、隣りの六畳間で布団を小さく上下させ眠る様は、『一度寝たら朝まで起きないから』などと言われれば思わず納得して『続き』をしてしまいそうな程だ。そもそも晶子が今ここにいるということすら知らない龍の寝顔に、晶子は

「寝てんなよー」

と小さく悪態をついた。

晶子の胸の内は、初対面の男との夜を前にする女のそれというよりもむしろ、男のベッド――この家にベッドはないが――の中で朝を迎えてしまった女のそれに近いものがあった。男とのセックスそのものよりも、それをたやすく受け入れるかのようにこんな状況にほいほいと入ってきてしまった自分が嫌なのだ。

晶子は、あんまりなかったもんなあこういうの、とこぼしつつ、少し高い椅子に腰掛け、四角いナチュラルカラーのテーブルに肘をついて、コーヒーを淹れる男の背中に視線を移した。男は手際よくペアカップをそれぞれソーサーに乗せ、インスタントコーヒーにお湯を注いだ。インスタントコーヒー特有の少し焦げたような匂いが晶子の鼻をくすぐった。

「どうもーお待たせしましたー」

男は卑しさを少しも感じさせない自然さで、トレイの上にカップと

ティースプーン、スティックシュガーそしてミルクをいくつか乗せて晶子の方を振り返った。

「そういえば……お名前聞いてませんでしたね」
男が晶子の前にコーヒーを差し出しながら、沈黙を破った。
「あ、そうですね。長谷川晶子、っていいます。えっと……」
「あ、すいませんこっちが先ですよね。大野です」
「下のお名前は？」
「啓介、って言います」
男、啓介はスティックシュガーをコーヒーに半分程流し込み、残った袋の口をくるくると閉じてカップの向こうに置いた。並の人より指関節一つ分は大きいであろう啓介の手が細かい作業を器用にこなすのが、晶子にはとても面白く見えた。啓介はそんな晶子の視線に気付いてか、どうぞ、と言うように晶子に右手を差し出した。晶子は、どうも、と軽く頭を下げ、ミルクのポーションを一つ取った。開け口の先を折り取って、尖った部分をフタの真ん中に刺して穴を開けて、ゆっくりとフタを剥し、一度コーヒーにティースプーンで渦をつくり、カップの縁辺りにミルクをたらした。
「そうやって一々穴開けるんですか？」
ミルクの渦の様子を眺めていた晶子に、突然啓介が問いかけた。
「え？　ああ、こうするとミルクが跳ねないんですよ」
「え、あの、ミルクって跳ねます？」
「跳ねますよ！　あの、フタと容器の縁のこの所に膜が張ってそれがこう、ぱちん、って」
晶子は自分が今し方空けたポーションを手に取って説明した。それを幾度か頷きながら聞いていた啓介はふーん、と関心した様子で新しいポーションを手に取った。空け口を折り、そのままフタを剥すと案の定膜ができて、はじけた。
「あ、本当ですね」
ポーションを持ったまま啓介が改めて関心する。

「だから言ったじゃないですか」
「えーでもこの位気にします？」
「しますよ！　服とかに着いたらどうするんですか！」
啓介は、あーまーそうですね、と若干不服そうにポーションを眺めた。そしてそれを晶子に差し出して、少し恥ずかしそうに
「あの……ミルクもう一つ、要ります？」
と聞いた。
　他愛のない話ばかりだった。例えば啓介の身長に話題が移ったとき、晶子が、バスケでもしてたんですか？　と聞くと啓介は、いえ、やったことないですねと答えた。それを聞いてどこか不満そうにしている晶子に啓介は、いや、バレーをしてたんですけどね、とした
り顔で続けた。

「あ、もうこんな時間ですね」
空のカップを片付けに立った啓介の目に、十一時を回った時計の針が映る。
「結構話してましたね」
冷めたコーヒーをティースプーンですくっては流ししながら晶子が答える。
「そろそろ帰ります？」
「あ……そうですね」
何迷ってんだ、と晶子は心の中で自身を叱責する。
「送ってきますよ」
「いえ、龍くん見ててあげて下さい」
晶子はそそくさと席を立ち、玄関へ向かう。スニーカーを適当につっ掛け、少し遠くなった龍に軽く手を振ってから、それじゃまたいつか、と外に出てしまった。
　軽いドアをそっと閉める晶子の左手には、コンビニのビニール袋がぶら下がっていた。外の音はいつの間にか夜の闇にほとんど吸い込まれてしまっていて、残っているのは風の吹く音くらいだ。晶子

は廊下を摺り足気味に歩きながらビニール袋を開け、すっかりぬるくなったまるごとバナナを取り出した。薄い鉄板でできた階段を音をたてぬようにしながら降りて、焦りを隠すように包装を破った。

外で食べるのははしたないな、そう思いながらもそれを食べようと口を開けると、そこからはどうしても照れ笑いがこぼれてくるのだった。

第四話：それって、私のことですか？

仕事は定時ぴったりに終わった。
刺身の盛り合わせの入ったビニール袋を右手にぶらぶらとさせて、晶子は部屋へ帰る。
「ただいまー」
『十五秒でピッキングできるタイプの鍵』をゆっくりと開け、ドアから首だけ突っ込んで誰にともなく言う。独り暮らしの部屋からの返事はもちろん、ない。晶子は暗い玄関にビニール袋を放ると、そのまま部屋を出て、鍵をかけた。

もう五時半をすぎているが、最近はこの時間でもまだ明るい。
最早花の色など見る影もない緑々とした桜の向こうには、オレンジがかったピンクと薄い紫の都営住宅が並んでいて、その反対側、いつかコンクリ色の都営住宅が建っていた土地には、子供の背丈程になったすすきやらハルジオンやらが、異国のライ麦畑のように萌黄色をしている。この町では、風が柔らかい。晶子は思う。今日は特に、と。

夕方のコンビニは外よりもほんの少しだけ明るくて、周りの景色を皆擦り硝子にうずめてしまう。晶子が中へ入ると、高校生らしい一組のカップルがレジ前で仲よさげに手をつないでいた。男の方がお釣を右手で受け取って、女の方がビニール袋を左手にかけた。
「ありがとうございました。またお越し下さいませ」
店長らしき中年のバリトンヴォイスが響いて、カップルがドアへ歩いた。白いビニール袋から、ベネトンの鮮やかなカラーが透けていた。
晶子はカゴを手に取った。前に持ったそれを蹴るように歩いていつもの場所へ向かった。向かいしなに、レジ近くの棚からハイチュ

ウのグレープを一つ拾いあげて、カゴに放った。

今日は来ないかもしれないし、来るにしてもこんなに早い時間ではないかもしれない。

分かっていても晶子は夕食の前にコンビニに来てしまったし、もう今夜のデザートも明日の朝食も選んでしまった。店を一巡りしてからまるごとバナナをショートケーキに換え、もう一巡りしてからショートケーキをシュークリームに換えたところで、いよいよ晶子はすることがなくなってしまった。

「私って子供好きだからなあ」

そうまでして彼等を待つ自分を『正当化』するように、晶子は独りごちた。カゴの中のハイチュウが自分にとって目的なのか手段なのか、晶子はよく分からずにいた。

興味のないものを手に取っては棚に戻すのを繰り返し、そろそろ店員の目が気になってきていた晶子の耳に、いつか聞いたそれと同じ、たどたどしい声が届いた。

「ママおねえさーん！」

……ママおねえさん？

自分のことなのだろうか。複雑なものを感じつつドアの方を向くとそこにいるオーバーオールの少年は間違いなく龍太郎で、その手を中腰で引く男は間違いなく啓介だった。

「あ、どうもこんにちはー」

晶子は啓介に会釈し、小走りで彼等の前に立った。

「あーいたいた。どうも」

啓介は答え、龍太郎の背中を軽くたたいてほら、と言った。すると龍太郎は頭を思いきり下げて

「ママおねえさんこんにちはー」

と声を張り上げた。――ママおねえさん、かあ、まだ独身なんだけどなあ。晶子は中腰になって、こんにちは龍くん、と返した。

「今日は早いんですね」
自分は普段通りだけれど、とアピールするように晶子が切り出すと、啓介はああそうそうそうなんですよ、と腿を打って続けた。「今日保育園の帰りに昨日の晩のことを話してやったんですけどね、そしたら『パパずるーい』って怒りだして。ママおねえさんに会うー、って」
な？　と啓介が龍太郎にほほ笑むと、龍太郎は啓介の腿にしがみつき、はにかんだ顔をうずめた。
「いやーでも助かりましたよーいてくれて」
こいつ怒らすと面倒ですから、と啓介が笑うと晶子も、はい今日はたまたま早くて、と腰を軽く反らせて背伸びをした。啓介の後ろで初老の男性が一人迷惑げにしていたが、カゴの中のハイチュウはそんなことはお構いなしで、楽しげに跳ねた。
「ああそうだそうだ、龍？」
啓介が、未だ自分の腿に顔をうずめている龍の背中をぽんと叩くと、龍は顔をより強く押しつける。啓介は呆れたように笑い、大きな腕を龍の脇に通して持ち上げ、ほーらどうした、と言って晶子の前に立たせた。龍がいくらはにかみ顔を啓介に向けたところで、啓介は助けてくれない。ようやく意を決した龍はオーバーオールの腰の隙間に両手を突っ込んで
「うちでごはんたべませんか！」
と体を揺らした。
「ええーいいのかなあー」
晶子はしゃがみ込む。
「いや僕からもお願いしますよ。泣かれてもたまりませんし」
「えーじゃあ、はい、ちょっと待ってて下さい」
そう立ち上がって晶子は店の奥へ小走りし、シュークリームをもう二つ拾ってレジへ向かった。深く考えずに玄関に置いてしまったお刺身に、今夜は涼しいから、と言い訳をしながら。

第五話：大きいけれど可愛い人です

この男には、下心だとかそういったものはないのだろうか。
手際よくカレー鍋をかき回す啓介の背中を見て、晶子は指を組む。
啓介はご丁寧にブルーのエプロンを着ていて、背中には完璧な長さの蝶結びがお玉の動きに合わせて揺れている。頭には黄色いバンダナを乗せて、極めつけには小さな声で『世界に一つだけの花』を口ずさんでいる。
本来ならば見るものに『頼もしい男』という印象を残すはずの男の料理姿も、啓介の手にかかるとそれはとても滑稽で、愛らしくさえ見えた。鼻歌の音程が所々ずれてさえいなければ、晶子の目に啓介はもっといい男として映っただろうが。
「ほんとに手伝うこと、ありませんか？」
「だーかーら座ってて下さい、って。ぼくらがいきなり呼んだんですし」
こんな当たり前といえば当たり前のやりとりさえも、晶子に『母の日に子供に料理を作ってもらっている母親』のような気分を味わわせるのだった。
「もうすぐ出来ますんで」
啓介の声がするのとほとんど時を同じくして、カレーの匂いがなめらかに漂ってきた。少し強張っていた晶子の肩がすとん、と落ちた。

なかなか良くできたカレーだった。
龍太郎への配慮だろうか、甘口のカレーに各自でチリペッパーをかけて食べるというスタイルで、付け合わせのサラダもチャツネの利いたそれとよく合っていた。龍太郎は昨日聞いた通りの大食漢で、大人の茶碗一杯分くらいのカレー、ではなく大人と同じサイズのサラダの方を悠々とおかわりしていた。

「あ、そうそうさっき買ったんですけど」
食事が終わると晶子は待ってましたとばかりにシュークリームをテーブルに並べた。
「一個どうぞ。はーい龍君も」
「ああ、ありがとうございます。ほら、龍。こんなときなんて言うんだっけ？」
啓介が龍太郎を覗き込むと、龍太郎は
「いただきます！」
晶子の予想通りのことを言ってのけ、パッケージを破いた。

「そーじゃないだろうがあ。ほら」
啓介が龍太郎に口パクをして見せるとようやく、龍太郎の口から
「ありがとうございました！」
保育園式に間延びしたそれが出てきた。
「はーいどういたしまして」
この二人のやりとりを見ていると、自然と口元がほころぶ。龍太郎はやはりとても可愛らしい子供で、その前で啓介は立派な父親なのだ。

第六話：変わってるのはお互い様です

「ただいまー」

誰もいない部屋に一度声を響かせ、やはりそこに誰もいないことを確認してから、晶子は玄関の電気を点けた。暖色に照らされた真っ白なビニール袋。いつかのお刺身だ。靴を足だけで脱ぎながら、中を覗き込む。あーちょっと乾いてる、食べる気しないな、漬けにしとけば保つんだっけ、漬けダレってお醤油と……あと何？　キッチンの調理台の上にどさっと投げ置いて、晶子は密閉容器を探しはじめた。

多分こんな感じ？　と醤油、砂糖、みりんで作ったタレに例のお刺身を赤身も白身もイカも引っ括めて適当に浸す。その密閉容器を常温保存するか冷蔵保存するかでまた少し迷って、なんか不安だし、と冷蔵庫に突っ込む。そして晶子は思い出したようにストッキングを脱ぎつつ、片足で跳ねてバスルームへ向かった。

――昨日はテキトーに浴びて、すぐ寝ちゃったんだよなあ――

晶子の頭をシャワーが軽やかに打ち、熱めのお湯が晶子を上から順に伝う。

ある可愛らしい少年の勘違いに引っ張られて、知らない男の家にのこのことあがりこんだ自分。あまつさえ今日なんてご飯まで食べてきて、（ままおねーさんにはちょっと辟易したけど）前からの友達みたいに――

そんなことをひとしきり思い返して、晶子はシャワーを止めた。

――やっぱ変かな、こういうの――

重みを増した真っ黒く長い髪を勢いよく後ろにかき上げると、バスルームのドアに水滴がぶつかり、砕ける音がした。その音はドアを撫でるように排水口へ流れて、まもなくバスルームは空になった。

シャンプーの音だけが辛うじて場を繋いでいる、二畳あるかないかのバスルームに、ふと冷静になってしまった女が一人。
冷静な女の脳裏にこびりつく、ややワケありの親子が一組。
そういえばママはいないんだっけ、昨日『ママいた！』って言ってたな、まだよく分かってないのかな、それともいなくなったばっかりなのかな――
晶子は蛇口を捻り、また熱めのシャワーを求めるのだ。

彼らは何だか『気になる顔』をしている。シャワーにぶつ切りにされ、自分の肩を滑る泡に彼らを重ね、ひとまず『全部彼らのせい』にして、晶子はいろんなことを洗い流す。そうして夜は更けてゆき、シャワーはただ晶子を打ち続ける。

第七話：疲れてたけど、それだけかなあ？

今日の仕事での収穫は、時給に換算して一万数千円の給料と、同僚の友人の『愛ちゃん』の話だ。夕方の私鉄に揺られながら、晶子は軽く伸びをした。

暇潰しには丁度よい『どうでもよさ』の話だった。

なんでも、その愛ちゃんは２３になった今まで恋の一つもしていないような奥手な娘で、しかしそれでいてルックスは童顔めでなかなかに可愛いのだそうだ。

で、その愛ちゃんが今、初めての片思いを経験しているのだという。お相手は『そういう娘』らしく誰もが羨むようないい男、と思いきやその真逆、誰もが敬遠するような『ダサい・キモい・ウザい』の三拍子揃ったある意味有名な男。愛ちゃんの友人である同僚は今説得に必死なのだそうだ。

『同僚の友人』という適度な距離が、話を盛り上げるのにぴったりだった。

――愛ちゃんそいつに騙されてるんだって――飴でもあげたとか？――子供じゃないんだから――あーでもアイツやりそう、なんか性犯罪者っぽいし――『お嬢ちゃん飴あげるから車乗りなよ』みたいな？――超変質者じゃん！――

――でも実はさ、その男すっごいイイ人なんじゃない？――ないないない！　絶対ないってアイツは！――えーでもその優しさに触れて愛ちゃんの心の傷がさー、――心の傷なんて私言ったっけ！？――――ううん、テキトー。――でもなんかそんな感じじゃない？　今まで全く男っ気ないとか――あーありそうなんかちっちゃい頃にさー、――ちょっと止めてよ愛ちゃんで遊ぶの――

愛ちゃんにすごい失礼だったなー。
目の前の窓の奥にホームセンターの赤い看板が映り、程なく電車が止まった。
片思いかー。電車を降り、遠い昔を思い返すように天を仰ぐと、そこにはただくすんだホワイトをしたホームの天井があった。そこに自分の中の『何か』が映ってしまいそうな気がして、晶子は恥ずかしげに前へ向き直った。

一旦家に帰り、五分ほどぼーっとして、冷蔵庫の中身を確認してからスーパーに向かう。今日の主菜は仕上がり未知数の元刺身だが、失敗していたときのことも考えて何か『それだけでもご飯が食べられるもの』を作る予定だ。
家を出る前に覗いた冷蔵庫の中は、例の密閉容器と卵数個、ウーロン茶のペットボトル二本と、何の為に買ったかも忘れたしらたきが一袋。もともと冷蔵庫には使った食材の残りしか入れず、調味料と缶詰以外は買い置きもしない上、おとといじゃがいもと豚肉ともやしと竹輪で謎の炒め物を作り、冷蔵庫の中を一掃したばかりなのだ。
（あーそっか、昨日お刺身しか買ってなかったじゃん）
呼んでもらえてよかったー。刺身だけでご飯を食べる少し悲しい自分を想像して、晶子は苦笑した。晶子の額に、ほんの数日前の今頃よりずっとオレンジの抜けた陽射しが当たる。もう夏になるのだ。

結局今日のメニューは肉じゃがと味噌汁（と元刺身）に決定した。
冷蔵庫の中の使う予定もないしらたきの存在も大きかったが、決め手はスーパーで売っていたじゃがいもの棚札辺りにあった、肉じゃがのレシピを書いたカード。一人暮らしを始めてからというもの（そのうち作らなきゃなー）とずっと思っていながら今一つ踏ん切

りが付かなかったメニューだったこともあり、丁度よかったー、と飛び付いたのだった。
レシピカードを見ながら食材を揃え、レジに向かった。レジ前でハイチュウに伸びた手を恥ずかしげに引っ込めて、向こうの食卓を想像してから。

――結局あっちは何食べるのかな――
両手のビニール袋を体の前にぶら下げて、晶子はほんの少しだけ思いをはせる。夕陽を正面から浴びている晶子は目を細めてゆったりと歩き、そのことを考えているようないないような、のんびりとした気分でいた。そしてそのまま数分歩き、角を幾つか曲がったあたりで、――あー、昨日のカレーの残りか――いよいよ考えることがなくなった。
なんだろ、疲れたのかな。
夕陽は左手に回ったにも関わらず開く気配のない目をしばしばとさせ、ビニール袋を持った手で伸びをした。ご飯の前に寝よっかなー、あー駄目駄目、絶対深夜まで起きないよね。
さー頑張らないと、と妙な唸り声をあげて気合いを注入し、角を左に曲がった晶子の目に映ったのは、単に『寝ぼけていた』では済まないような、信じられないものだった。

道路の向こう側。夕焼空に佇むグレーのアパート。いくら細い目をこすっても、そこは啓介達の住むアパートだった。

第八話：今日のご飯は肉じゃがですよ

誰か適当な偉人の伝記を読み返してみるまでもなく、良い事や悪い事というのはどちらも『しばしば重なるもの』だ。少し冷静になって考えてみればそれは至極単純な確率論で、それに依れば例えばそのどちらかが重なり続けることも、きっちりと交互に起きることも極めて不自然なことだ。

しかし人はその確率論にある種の神秘性を求めてしまう。例えばある出来事と出来事がうっかり重なってしまった時に、またそれによって事態が思わぬ方向に進んでしまったときに。

あー私何してんだろ。しばし呆然としていた晶子はふと我にかえった。伸びをするように髪の毛を書き上げる晶子の目の前をほとんど空の軽トラがゆっくりと横切ると、ぬるい風が晶子のショートヘアを揺らした。

何もないところだ。

いや、実際に何もないわけではないが、言ってみれば『何もない匂い』がするのだ。今ここではアパートの隣りにある模型屋も、その前に停めてある数台の小さな自転車も、こちらの道沿いにある貫禄ある民家もすべてが『背景』ですらない『キャンパスそのもの』で、その中に書かれるべきモチーフが書かれていない、そんな感じだ。晶子はそのモチーフを探すように辺りを見回していた。スーパーを出たときよりも景色の赤みが少しだけ増していて、後ろを振り返るともっとオレンジをした夕日が晶子の真正面にあった。

晶子が何をするでもなくそこに突っ立っていた時間は二分に及んだ。啓介の家の前に来たことに気付いた時点で直ぐに引き返すことができなかったのは、果たして疲れのためだけだったろうか。いや、

もしかしたら晶子はこのすぐ後起こるある事態を、心のどこかで期待していたのかも知れない。尤も、そうなったその後のことまで考えが及ぶことはなかっただろうが。

金属を叩くくぐもった音がどこからか連続して響いてきた。ゆっくりとした低めの音と、それに重なるように響く軽快な音。耳を澄ましてみるとそれはアパートの方から響いてきていて、晶子がそちらを見ると丁度啓介と龍太郎が鉄でできた階段を降りてきていたところだった。晶子は二人に向かって手を振った。ほとんど無意識に。

道路の向こうの晶子に気付いた龍太郎は鉄砲玉のように走り、『ままおねーさん！』と声を挙げた。啓介は一体何が起こったんだとでも言いたげにその後ろを小走りで追いかける。龍太郎はそのまま晶子の右太股に勢いよくしがみつき、それを合図にするように啓介が顔を上げた。

「あ、どうも……」

こんにちは、の『こ』の音が出る辺りで晶子はバランスを崩した。このくらいの子供は加減を知らないだけに、ぶつかってこられればなかなかのパワーがある。くの字に折れて倒れる体を左足でよたよたと支えると、お腹に力を込めた声でなんとかこんにちは、と起き上がった。その間、右手はずっと龍太郎の頭の上に、左手はずっと龍太郎の肩にあった。

「あ、こんばんはー」

啓介は初めて会ったときのようなぽかんとした表情を見せた。

「これからお買い物ですか？」

『都合の悪いことを聞かれる前に』晶子が尋ねると、

「ゆうしょくのお買い物ー！」

ええまあ、とこたえる啓介を龍太郎が遮った。夕食なんて言葉、一体何処で覚えてくるのかしら。そんなことを考えていると、晶子の

口許も自然と綻んでくる。ゆうしょくのお買い物かー、と頭を撫でていると、晶子はふとある衝動に駆られた。
「じゃあ、今日は私がご飯作りますよ」
ビニール袋のぶら下がった左手を持ち上げた。
「本当ですか？」
と喜ばしげに尋ねる啓介に、丁度材料もあるんで、と微笑んで見せると、啓介は龍太郎を引き離し、事の次第を説明し始めた。

衝動というよりはある種の口から出任せといったところだろうか。跳ねて喜ぶ龍太郎を眺めながら晶子は『行かなければならなくなった』かのような苦笑いを浮かべた。視線を外した先のビニール袋の中には『お袋の味の代名詞』の材料とレシピのカード。傍から見れば随分と白々しい女だ。

第八話：今日のご飯は肉じゃがですよ（後書き）

もう言い訳は致しますまい

次はもっと早く書きます

第九話：あなたのパパは不思議です

隣りのダイニングテーブルでものを食べたことはあっても、キッチンに立ってものを作るのは今回が初めてだ。

晶子は何となく落ち着かないといった風に調味料の居場所を探り、ビニール袋を開けた。えーっとこれが肉じゃがで、あとお味噌汁には白菜と……あー玉葱あるからそっちでもよかったなー、であとはじゃがいも使って……あーしらたきは……なくてもいっか。

スーパーで考えたことをほとんどそのまま反復し、また調味料の居場所を探る晶子の目の前に啓介が、どうぞ、と言ってエプロンを差し出した。

あ、どうも、と言って晶子はその紐を首にかけた。エプロンなんて高校の調理実習以来だ。

野菜を切っている間は、しばしば調理から意識が飛んでしまう。野菜の堅さによってテンポを幅広く変える包丁の音のせいもあるかも知れない。視線とほんの少しの意識だけを手元に残して、晶子はやはり『どうでもいいこと』を考え始めた。すぐ足下で龍太郎のはしゃぐどたどたという音が聞こえて、すぐに啓介がそれをたしなめつつ抱え上げた。

晶子が考えたのは、他でもないこの二人のことだ。いや、特に今回は啓介のこと、と言っていいかも知れない。

なんというか、彼には謎が多いのだ。

謎と言っても例えば――奥さんはどうしたか、とか――ワイドショーでも見るような客観的なものではない。晶子は『何故か奥さんのいない子持ちの男』が気になるのではなく、単純に啓介という人間が気になるのだ。啓介という人間そのものが、謎の多い人だと思っているのだ。

晶子と初めて逢ったとき、その次の日に会ったとき、啓介は当然のように晶子を部屋にあげて、そして当然のように晶子に手を出さなかった。

晶子は今でこそ（と言ってもまだ三度会っただけだが）『そういう人なんだ』だとか『そもそも手を出す方がおかしいじゃない』と思えるようになったが、普段の『何を考えているのか今一つ確認できない感じ』もあいまってやはり心のどこかでは釈然としないのだ。

初対面の女を家に呼ぶことと、それに手を出さないこと。

――絶対なんかあるよね――二つの事象を矛盾だと思うのは、晶子だけだろうか。人参を一本余計に切ろうとしていたことに気付いて、晶子は慌てて手を止めた。

それから晶子には、何かを考える余裕など全くなかった。まずは玉葱に苦戦し、初めての肉じゃがの手順に少しだけ苦戦し、それよりもむしろレシピのカードを二人から隠すのに大いに苦戦した。

極力二人の死角に入りポケットの中をちらちらと覗いていたが、しばしば不意に啓介が、心配なのか興味があるのか分らない様子でこちらに来るので、ひょっとしたらその時啓介はそれを見たのかも知れない。気付いた様子こそ見せていなかったが、もともと啓介は『そういう男』だ。

晶子は内心ひやひやしながらダイニングテーブルに出来上がった料理を運んだ。奥の部屋で遊ぶ二人を呼ぶが早いか、龍太郎がものすごい勢いでこちらに駆け寄ってきた。

第九話：あなたのパパは不思議です（後書き）

一月以上も空いてしまいました
ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

こんなタイミングでなんですがちょっと気になったことを一つ
なんかこのタイトルを「夜のコンビニに幼児は……」だと思ってる人がいるっぽいですが
「幼子（おさなご）」です
いや、どうでもいいんですけどね

第十話：私の料理はおいしいですか？

これ程落ち着かない食事というのもそうあるものではないだろう。
さして仲睦まじいわけでもない男の家で初めて作った料理を二人と一人で向かい合って食べる。味はどうか、結局レシピはばれてしまったのか、肉じゃがに味噌汁などという献立は子供受けするのか、そもそも『啓介受け』するのか。考えだせばきりがないことを延々と考え続ける晶子には、目の前の啓介と何気ない会話をする余裕もない。割と作り慣れている筈の味噌汁の味さえ薄く感じるのは、味付けを間違えたからだろうか。

とうとう同僚との昼食なら殆ど気にしないテーブルマナーさえ気になりだした晶子は、頭を落ち着けるように姿勢を正した。茶碗の位置を、それから箸の持ち方を入念に確認してから、二人と食事のペースを合わせようと顔をあげた。何かを待っているような顔付きの啓介と目が合って、晶子は初めて自分が空返事ばかりしていたことに気がついた。慌てて少し記憶を辿ってみると、

「おいしいですね」

だとか

「龍太郎も肉じゃが大好きなんですよ」

などと言ってくれていたような気もした。

気付かないうちにかいていた（冷や汗も含む）汗が窓の向こうに吸われ、方の辺りが何となしに冷えてくる宵の口。

「洗い物くらいは僕がやりますんで」

とシンクに向かう啓介の背中を何を思うでもなく眺めつつ、手持ちぶさたをごまかすように龍太郎の顔にソフビの人形をぶつけてやっていると、その背中の向こうから何かに水を溜めるとき特有の篭った水音と共に、

「コーヒーでいいですか？」
との声が、続けてソフビ人形相手に闘志を燃やし、奇声をあげてはしゃぐ龍太郎をたしなめる気の抜けた声が聞こえた。
「あ、ありがとうございます」
そう答えてから晶子は、怒られちゃったね、とでも声をかけてやろうと龍太郎の方に向き直った。今し方まで手の届く所にいた筈の姿は既にそこにはなく、
「ままおねーさんもやろう！」
と声のした一つ奥の部屋を見てみると、龍太郎はカーペットに座って五十音の書かれた大きなボードの電源を入れていた。

ガスの燃える音、食器同士のぶつかる音、啓介の口ずさむ間の抜けた『モーニング娘』。何か手伝おうにもキッチンはいささか狭すぎ、何より一人でお茶の用意をしている啓介のエプロン姿はどこか楽しげで、晶子は龍太郎の挑んでいる五十音クイズに、ヒントを出してやったり指を指してやったりして付き合っていた。
その構図は何となく三人の定位置のようで、しかしどこかに違和感を孕んでいた。それは『家族二人と一人の他人』の間にごく当たり前に生じる筈のそれではなく、ペンケースの中に全て収まっていたペンがどうしても入りきらないときの感覚に近いものだった。
とは言ってもそれは晶子にとってあまりにも些細なもので、恐らくは二人の寝室であろう部屋に初めて入ったことによる何となくそわそわとした感じの中に埋もれてしまうのだった。

晶子が小文字のないボードで龍太郎の『りゅ』の字を出すのに悪戦苦闘していると、お湯の沸くのを待つあいだがさごそと戸棚を漁っていた啓介が
「すいません、ちょっと龍太郎見ててもらってもいいですか？」
とこちらに歩いてきた。
「あ、はい、大丈夫ですよ。火使ってますもんね」

「いや、ちょっとお茶菓子買ってこようと思って」
「えっ？」
会って三日やそこらの女に家の留守番を頼もうというのだ。さすがの晶子もこれには辟易である。
「あの、それってつまり……」
「えっ、あ、そうですね、ごめんなさい」
嫌がっているようにでも見えたのか、それとも今になってやっと自分の言ったことの意味に気付いたのか。啓介は少し照れたような苦笑いを見せた。
「じゃああの……一緒に、一緒に！　買いに行きましょう！　お茶菓子」
「あー、はい、そうですね」
黙っていれば啓介の口から出たであろう結論を急いだのは、今、瞬間的に感じた胸を小さな手に掴まれたような気持ちを紛らわす為でもあったかもしれない。

第十話：私の料理はおいしいですか？（後書き）

はい、今まで読んでくれてた人はみんな離れちゃったんじゃないかという位間があいてしまいました（汗）

さすがにこの超不定期更新では作者にも読者様にも不都合だろうということで

ｃｈｏｃｏはこれから書き溜めに入ります！

数話分のストックができてからコンスタントに更新できるようにしたいと思いますので

皆様どうか長～い目で見守っていて下さい

第十一話：私もパパに「いたずら」します（前書き）

お久し振りです

第十一話：私もパパに「いたずら」します

今このコンビニの中に晶子のようなものの感じ方をする人がいたとしたら、この晶子達三人を見てどう思うだろうか。傍目には極めて普通の三人家族、夜コンビニにやってくる少年とその親としてふさわしいものには見えないだろう。尤も、この三人は家族ではないし、うち二人はつい先日晶子が『夜のコンビニに似つかわしい』と判断した父子なのだが。

一緒にお茶菓子を選ぶのも何となく気が引けるのか、晶子は一つ向こうの棚で雑誌を手に取ってみたり、そこから背伸びをして啓介の方を覗き込んでみたり、あまり離れているのもよそよそしいかな、と啓介の所に歩み寄ってみたり、それでもやはり一緒には選べずに背後をうろついてみたりした。店のガラスに映る挙動不信な女と目が合い、晶子は苦笑した。そこには店内の様子がくっきりと映っていて、外から街灯に照らされた数か所だけ影がぼやけている。

こんなとき、皆ならどうするのだろうか。晶子はあてのない『皆』について考えた。そしてまもなく、大抵の人に『こんなとき』は訪れないのだと気付いた。

啓介はどうやら、お茶菓子を買うついでに自分達の買い物もしているようだった。

梅味の小振りな缶チューハイを二つ、2リッターのオレンジジュースを一本、紙製のパッケージに五本入った安いひげそりを1セット。『ゆうしょくのお買い物』の時に買っていればもっと安く済んだものばかりだ。龍太郎は時折晶子の所へかけよってみたり、父にハイチュウをねだってみたり、まんまとカゴに入れてもらって大喜びしたりと、いかにも健全な少年といった風に父について回った。

晶子はふと、この二人を買い物に連れ出したくなった、夕方買い

物に行っているであろうスーパーで晶子がカゴを押して、
「買い忘れはない？」
と啓介に念を押し、あまり暴れ過ぎないようにと龍太郎の手を引くのだ。そうすればもっと安い買い物がさせられるし、こんな時間に龍太郎を連れ出さなくていい――そこまで考えて晶子は我に返った。
「これじゃ『お母さん』だ」

気付けばもう啓介はレジにいて、その前では女子高生らしき店員がたどたどしい手つきで品物を袋につめていた。黒い制服に栄える焦げ茶色のショートヘアと、若くて白い肌。その額に一瞬ヘアピンが光ったのを見て、晶子は仕事中に前髪が邪魔になっていたのを思い出した。
「ヘアピンもいいなあ」
晶子は雑誌コーナーの向かいに歩いた。毛染めに整髪料、男性化粧品、確かこの辺りにヘアピンがあった筈だ。棚を探すとまもなくそれは見つかった。可愛い女子高生に触発されてヘアピン、我ながら最近どうかしてる。晶子は前髪を一束つまんで、その場にしゃがみ込んだ。
もう二人は買い物を終えたらしく、自動ドアの方から
「行きますよー！」
と龍太郎の声がした。小さい子の敬語というのは可愛らしくて、どこか滑稽だ。晶子は早く買い物を済ませようとヘアピンを手に取った。そしてその時、視界の少し右に『あるもの』を見つけた。
「先に行ってて下さーい！」
晶子はまるで悪戯を思い付いた少女のように歯を見せた。
「待ってるんで大丈夫ですよ」
啓介の声がした。今は待たれると問題があるのだ。
「いや、もう少しかかるんで」
「え、っと、じゃあ、行ってますね」
「すぐ追いつきまーす」

晶子は、後でね、と龍太郎に小さく手を振った。

二人はドアを出て、まもなく見えなくなった。晶子は、よし、と気合いを入れて『あるもの』を手に取り、女子高生のいるレジで会計を済ませた。晶子の表情にはあからさまな照れが見え隠れしていた。

袋は要りません、レシートもいいです。早く追いつきたいのか早く彼女の前から去りたいのか、ついには二十円のお釣も募金させて、晶子はそそくさと店を出た。ヘアピンと『あるもの』――小さなコンドームの箱をポケットにねじ込んで。

第十二話：おやすみなさい、頑張るね（前書き）

エコクラフト編んでたら遅くなりました

第十二話：おやすみなさい、頑張るね

晶子はこれから、女子高生の前で魂胆の見え透いた買い物をするよりはるかに度胸の要ることをしなければならなくなってしまった。『誘われる』こと位は人並みにあった晶子も、こと『誘う』となると全くの初めてだ。まさか自分が誘われるときのようにする訳にはいくまい。かといって『正しい』誘い方など知る由もない。

「男なんてちょっと甘えてやればこっちのもん」などという漫画のような話も聞かないでもないが、晶子にはその『甘え方』が今一つピンとこない。

最初にここに来た日のこの時間、龍太郎は既に寝てしまっていたのではなかったか。晶子はふと思い出し、そしてどきりとした。『眠られたら誘わなければならない』のだ。

晶子の見ない間にお茶うけはカントリーマアムに決まっていたようだ。ごていねいに皿に並べられたそれは部屋の雰囲気に、そしてコーヒーによく合う。龍太郎は龍太郎で、目の前に『お菓子』が並べられていることが単純にうれしいらしく、啓介の膝程までしかない体で既に五つ目を食んでいる。コーヒーにクッキー、ナチュラルカラーの明かり、初夏の湿り気、みんなまとめて藍色に映し込む窓、家主がくつろぐ為に、来客にくつろいでもらう為に出来上がったダイニングで、晶子は啓介と目を合わせられずにいる。

啓介と話すとき、晶子はまだどうも、彼との『距離感』が掴めない。初めて会ったときからそうだ。なぜか晶子は啓介と、知己の友人とするような至極どうでもいい話をしたくなる。その欲求に従う間に時間は過ぎ、結局二人はお互いのことをよく知ることができないまま別れるのだ。

「そうそう、カントリーマアムってトースターで少し焼くとおいし

いんですよ」
晶子はもともと話し手にまわることの多い人間だが、こと啓介の前ではそれが顕著だ。
そして啓介は晶子のどうでもいい話をたいそう面白そうに聞き、その時々に応じてうまく次の話題を持ち出す、『聞き手』の人間だ。
それが生まれ持っての彼の気質か、それとも晶子を気遣ってのことかは定かではないが、とにかくそれが彼のどこかすっとぼけたような調子とあいまって、二人の下らない話に一層花が咲くのだ。
「へー、そうなんですか。でもトースター……魚焼きグリルじゃまずいですかね」
「魚焼きグリル？　トースターないんですか？」
その通りらしかった。
晶子の驚いた表情に気付いたのか、啓介は少し恥ずかしげにうつむいた。晶子がトースターのないことに驚いたのか、それとも代替案として出した魚焼きグリルに驚いたのか、晶子自身にも、もちろん啓介にもわからない。外はとても静かで、遠くのサイレンの音だけが細く響く。それを自動車の音がかき消して、そしてサイレンは何事もなかったかのように続く。
「じゃあ、朝とかどうやってパン焼くんですか？」
『魚焼きグリルでパンを焼くと早い』というテレビで得た情報を思い出して、晶子は尋ねた。
「あ、ウチは朝、ごはんなんで」
「そうなんですか」
たとえささやかでも、予想を裏切られることには少なからず驚きが伴う。
「へー、じゃあ……」
晶子はあごの下で指を組んだ。
「私も、明日の朝はごはんにしようかな」

「おー、もう眠いか、ん？」
ふいに啓介が立ち上がり、龍太郎の脇に手を入れて抱えあげた。晶子が今まで見た中で最も父親らしい顔で。当の龍太郎は
「ままおねーさんがいいー」
と力なくぐずり、起きていたい、それでも父の手の暖かさには勝てない、といった様子で、細くなった目にうっすらと涙をためている。
「ほーら、もう眠いんだろ？　ままおねーさんにおやすみしな？」
「……おやすみなさい」
「よーし、いい子だ」
晶子が龍太郎に
「おやすみー」
と手を振ると、二人はふすまの向こうに消えた。眼前から眠たげな龍太郎がいなくなって、晶子は我に返ったようにポケットをまさぐった。いよいよだ。

第十三話：なんだか少し迷っています

例の箱を開け、四角くパッケージングされたそれを一つ取り出す。その中にはじっとりと濡れたピンク色のゴムの膜。自分が今まさにやましいことをせんとしているのだという自覚が否応なく高まる。

この封を切った途端、自分の中の何か大切なたがが外れてしまうのではないか。『そうなった後』の自分を想像してみて、晶子は気味が悪いと思った。何に根差しているかも定かでない胸の高鳴りがして、晶子は手の中のそれを急いでシャツのポケットに突っ込んだ。

笛の音のような寝息が聞こえる。その音は晶子の脈をゆるやかに通って、すっと胸から下に流れる。襖から顔を出し

「もう寝ちゃいました」

と出て来たあたたかな目の啓介を見て、晶子は細く長いため息をつく。

晶子の目に映る啓介はまごうことなく『父親』で、『男』として見るのはどこか気が引けた。そしてその父親の後ろには、以前啓介と一線を越えた見知らぬ女がいた。晶子はこれから自分がすることを想像して強い罪悪感を覚えた。何かの漫画で読んだように、その罪悪感が背徳の悦びに変わる、などとはどうにも思えなかった。

「あんまりぐずらないんですね」

目の前の父親に相応しい話がしたくなって、目の前の男から少しだけ目を背けたくて、晶子はダイニングと寝室の間の居間にあるちゃぶ台に着いた。

晶子の部屋の隣りには四十手前の両親を持つ四、五歳くらいの女の子が住んでいて、毎夜毎夜泣き叫んでは両親からの罵詈雑言を浴びている。ひきかえ外ではやけに大人しい彼らを幾度となくコンビニで見掛けたことも、晶子が持つ『夜コンビニに来させられる少年

少女』に対する先入観の一端となっている。
「昼間はそれこそスーパーボールたたきつけたみたいにはしゃいでるみたいですからね。コンビニ行って、帰ってくる頃には大方電池切れですよ」
晶子の目と襖の奥との間で視線を一、二度行き来させて啓介が答えた。昼寝もろくにしないっていうし、と付け足しながら晶子の向かいに着く。
「あそこ、毎日行ってるんですか？」
晶子は飼い主の帰宅に気付いた犬のような目をした。龍太郎に飛び付かれたあの日以前に、啓介達やそれに似た人物を見た記憶はない。
「ええ、まあ尤も、この前までは向こうに行ってたんですけどね。ちょっと色々あって」
啓介は件のコンビニと反対の方向を指差した。その方向へ少し歩くと、黄色い看板のコンビニがある。晶子が最後の言葉の含みに反応する一寸前、啓介は急いだように
「そうそう、コンビニ行ってからじゃないと不思議と寝ないんですよ、コイツ」
と襖越しに龍太郎を指差した。
　啓介の視線が晶子の右肩の後ろあたりで一瞬だけ止まった。晶子はその辺りがどうしてもこそばゆくなって、そうなんですか、と相槌を打った後、ゆっくりとそちらを振り返った。そこには淡めの原色で塗られたラックと、その上に小さな鏡や手前に倒れて写真の見えないフレームがある位で、特に変わった様子は見られなかった。

「あの、長谷川さん？」
一、二言前から崩れたままの調子で啓介が呼び掛けた。晶子に見られたくないものでもあるかのようにも、単に何故振り向いたか分からないかのようにも聞こえた。
「え、はい？」
「あ、いや、何でもないんですけど」

それにつられて、二人の会話のテンポがふるい器の上の小麦粉の山のように崩れてゆき、そこからほんの少しだけ生まれた焦りのような感覚が、晶子にポケットの中の異物を思い出させた。
　そうだ、やらなきゃ。決意というよりはむしろ義務感に近いものだったかも知れない。

「あー、えー、すみません」
晶子はそう返事をしてから、どうしよう、どうしようと二秒程考えて立ち上がった。どう見ても自然な流れではない。そのまま小走りで啓介の隣りに着くと、啓介は目を一回り大きくして晶子の首の辺りを見た。無理もない。『今日は二人ともどうにかしている』

　啓介が晶子から十センチ離れたので、晶子の方は二十センチにじり寄った。二人の二の腕と腿がぴたりとくっついた。ええい、ままよ。
「……長谷川さん？」
啓介が、どうしたんですか、と言い切る前に晶子は啓介を押し倒した。啓介の頭が壁にぶつかって、ごちんと大きな音をたてた。

第十四話：パパの様子は、どうですか？

コトの済んだ後、晶子は啓介と一言も口をきかないまま、逃げるように部屋を出てきてしまった。ショーツのゴムが右腿に食い込んで、歩く度にぎしぎしとこすれる。服の乱れは急いだなりに直したつもりだったのだが。パンツをひっかくようにしてそれを直そうとしながら、晶子は早足で歩く。自宅の方向にはあえて向かわない。

パンツをひっかいて、右足を大きく外に踏み出して晶子は歩く。汗やいろいろで重くなった衣服がまとわりつく。『とうとうやってしまった』女が一人、疲れた様子でガードレールに腰掛けた。ゴムがようやくあるべき位置に落ち着いた。

晶子が上にいられたのはそれこそ最初だけで、その意図を理解した啓介はにやりと笑って晶子の首筋にすがった。晶子はまるでスイッチを切られたかのように動けなくなった。啓介の行動が予想外だったというよりも、それから先のことなどまるで考えていなかったのだ。

それから先は、まるでエレベーターの中でしているかのように手早く終わった。セックスと呼びうるギリギリまで『お遊び』を削ぎ落とした行為。理由はともかく、二人共がそれを望んでいたようだった。

『エロい』今の自分にぴったりな、軽々しくて汚い言葉だ。晶子は息の多く混じった笑いを吐いて立ち上がった。パンツが両腿から音をたててはがれ、その間に冷たい夜風が抜けた。

適当な角を一つ曲がると、晶子の目の前には見知らぬ家々がずらりと並んだ。カーテン越しの明かりがいくつか見えるが、生活の匂いは陰に遮られて伝わってこない。景色が変わったのを引き金にして、晶子の頭の中に啓介の顔がよぎった。

啓介は今まで自分のことをどう思っていたのだろうか。今日の一件でそれがどう崩れてしまったのだろうか。尻の軽い女だと思われてしまったのではないか。暗い面持の家々が一斉に晶子を軽蔑の眼差しで見た。引いてゆく汗に追い討ちをかけるように、車の通る音がした。

そもそも、一体何故自分はこんなことをしてしまったのだろうか。晶子は『目』から逃げるように歩く。いくつか角を曲がった先で自動販売機を見つけて、晶子は普段あまり飲まないコーラを一つ買った。プルタブを引くと泡がわき出て、晶子のシャツの袖を汚した。炭酸飲料は、なんとなく頭の中を洗ってくれる気がする――袖の泡を手のひらで払い落として、一口含んだ。舌が痛い。

そういえば、一体自分はいつから、啓介をそういう対象として見ていたのだったか。晶子はまた一つ角を曲がった。歩きながら何かを飲むのは、意外と難しい。

『そういう対象』晶子の喉元にその言葉が引っ掛かった。男と女の間を『結ぶ』行為をする相手。晶子は思わず声に出して、脳裏によぎったものを否定した。

「そういう意味じゃなくって……」

晶子は立ち止まって、コーラを一気に飲んだ。喉が焼けるように痛んだが、それは頭の隅にこびりついたものを洗い流してはくれなかった。

いくつ角を曲がっただろうか、晶子は見たこともないT字路に突き当たった。ふと携帯電話を開くと時刻は既に十二時を回っていて、カーブミラーはすっかり夜露に覆われていた。右を向いたそれがぼんやりと光り、続いて晶子の目の前を暗い色のワンボックスが通り過ぎた。

道に迷った。晶子が振り返ってみると、そこは既に晶子の知らない道だった。晶子の目と目の間に一気に疲れが澱んだ。ま、いっか。

明日は休みだし。はかどりそうにもないが、晶子はもう少し考え事を続けることにした。

第十五話：どうして君が来たのかな？（前書き）

間に合った

第十五話：どうして君が来たのかな？

晶子が家に帰ると既に深夜の二時を回っていて、そのままベッドに倒れ込むといつしか昼の二時を過ぎた。
隣りに啓介はいないし、ドラマに出てくるような純白のシーツもない。ベッドの右隣りの窓のカーテンを開けると日の光がなだれ込んできて、それでも部屋はどこか薄暗かった。晶子は半日前の『汚れ』がそのままこびりついた身体を一通り流した。熱いシャワーを浴びた頭は、拍子抜けする位に冷めてしまう。洗濯機回して、あとお刺身も今日中に食べちゃわないと。
晶子は風呂からあがり、洗濯物を済ませている間に刺身を一つだけつまんだ。
それはやけにぐずぐずとしていて、甘ったるかった。
きっとみりんが多かったのと、あと砂糖が余計だ。
容器の中身をもったいなげに三角コーナーに流して、晶子はいつもどおり、昨日帰りしなに買った菓子パンの袋を開けた。
パンツの左ポケットの口辺りに異物感を覚えて、晶子はその犯人を取り出した。
それはいつか龍太郎のために買ってそのままのハイチュウで、包みは真ん中でぐにゃりと折れ、中の銀紙が顔を出していた。そうだ、今朝はご飯にするんだった。晶子は思い出した。ま、どうでもいっか、おかずにするものもないし。晶子はパンを一口かじった。晶子の口の中は既にご飯の味を欲していて、デニッシュ生地のそれはやたらと軽い味がした。

その日の夜、晶子は、休みだから、と久々に作った天ぷらを平らげ、いつものように外に出た。調子に乗って買ったシソの葉がいくらか余ったけれど、今週中に使い切れるだろうか。シソを使うメニューをあれこれと考え、しかし何も思い付かないでいるうちに晶子

はいつものコンビニに着いた。空の藍色はまだ透き通っていて、どこからともなく女性のよく通る声がする。店内に入り、自動ドアが閉まると同時にその声は消え、代わりに軽いノリのＤＪが流行のＪポップを紹介し始めた。

晶子は毎日ここで買い物をしていて、ある日ここである少年にママと間違えられた。その少年が龍太郎で、その父親が啓介だった。二人と一人は当り前のように近しくなった。晶子は何も買わないまま店を出た。あくまでも、『ここに売ってないミントを買わなくちゃいけないから』。

はるばる自宅の反対側まで歩くうちに藍色は少し深くなっていて、青色の看板をした目的の建物はその中で真白く光っていた。店内に入るが早いか、晶子は、これを買いに来たんだと言わんばかりにピンク色の四角いミントを二つ手に取った。他の店には、青や水色のものしか売っていない。そう、この辺だとここにしかないんだ。晶子は一人で納得して、続けていつもの買い物を始めた。

普段来ない店であるせいか見慣れないデザートはたくさんあるが、何となく気分の乗るものがない。

何となく食べたい気がするような物、手に持っては戻し、手に持っては戻ししていると、なんだか今日は無理をしてまで買わなくてもいいのではないか、と思えてきて、そこで初めて自分が無理にどれかを選ぼうとしていたことに気付く。結局ミントだけを持ってレジに並んでいると右腿にどすん、と何かがぶつかった。視線をそちらにやるとそれは子供の頭のようで、続いてこちらを見上げたそれは間違いなく龍太郎だった。

第十六話：おねえさんてば、馬鹿だから。

気付いたとき、晶子は既に店から飛び出していて、手には会計を済ませていない二つのミントがあった。

晶子は軽いパニックに陥っていた。手に持ったミントに、或いは来ない筈の場所に来た二人に、或いはその二人から逃げ出した自分に。早歩きはいつしか小走りになり、そのまま勢いよく自室の扉を閉めた晶子は、手に持ったそれをヒステリックにごみ箱に投げ捨てた。自動ドアの前ですれ違った啓介の表情は、思い出せない。

部屋の中は外の熱気がこもったままで、窓を開けてもそれはしばらく内にくすぶっている。晶子は二人掛けのソファに腰掛けて、クッションにうつぶして、それを投げ出して、動悸や、荒くなる呼吸や、のどの奥からこみ上げてくるものを押さえ込もうとした。

泣いてしまえた方が気が楽だったろうか、晶子がどれだけえづいても、目頭がズシリと重みを増すだけで、涙は出てきてくれない。

晶子は理性を消し飛ばしてしまいたかった。今し方起こったことを、一つづつ処理してゆく自信がなかったから。

何で来たの！？　晶子はここにいない二人にいわれのない怒りをぶつける。啓介を襲ってしまった自分が、そのまま逃げるように部屋を出た自分が申し訳なくて、二人と顔を合わせるなんて考えたくもなかったのだ。晶子は認めざるをえなかった。

今日、二人があそこに来ないでくれていたら、もう少し気持ちを落ち着けることができたのに。本当に、一体どうして彼らはあそこに来たのだろうか。知るべき謎ができたがために、その謎を解決する機会が失われた。

どうして。心の中の本当の思いをそんな言葉で隠して、寝返りで消化しようとする間に晶子は眠りについた。眠りについている間に

初夏の夜は更け、そして明けてゆく。

晶子が目を覚ました頃には既に時刻は始業時間を回っていた。どうせ遅れるのだから、と朝風呂を浴びているうちに、晶子は会社のことなどどうでもよくなってしまった。

風呂あがりの濡れた頭で電話をかけて、出掛けに気絶した、などと言って休みをもらう。ふとテレビを点けるとチャンネルはなぜかＮＨＫ教育テレビに合わせられていて、そこでは本の上をころがっていたビー玉がドミノを倒し、ビー玉の通ってきた道を横切るように倒れていったドミノが今度はミニカーを動かしていた。ほぼ習慣的にキッチンに立って、晶子は昨日結局何も買わなかったことを思い出した。ぶら下がった洗濯物から適当に服を選び、ごみ箱からミントを二つ取り出した。これは仕方のないものだ、と一つの包装をやぶいてポケットに入れ、もう一つをテーブルの上に放った。

外に出ると、晶子の眼前には皮肉なまでの青空が広がっていて、それは晶子にほんの少しの勇気をもたらした。

「もし、今あそこに行って啓介さんがいたら、おとといまでのことをきちんと精算しよう」

その勇気の裏には、どうせいないだろうという打算と、少しだけいるのを期待する気持ちとが背中合わせで隠れていた。まるでコイントスをするような心地で晶子は朝食を買いに出かけた。三人が初めて出会ったあのコンビニに。

第十六話：おねえさんてば、馬鹿だから。（後書き）

前回切りどころを間違えたせいで今回やたら短くなってしまいました、すみません。

第十七話：今朝は二人でゆらゆらと

朝の喧騒も一段落、といったけだるいものを漂わせた町を歩く。勇んで歩いてみたはいいものの、目的地に近付くにつれ妙な不安がつのる。仮にいたとして、自分はちゃんとやれるだろうか。

都営住宅の脇をぬけて、公園を曲がってすぐ左。

どことなく霞がかったようなガラス戸の目の前に立つと、誰かがそこから出てきて、そして立ち止まった。マウントレーニアの一番甘いカフェラテにストローを突き立てる、ごつごつとした大きな手。顔をあげてみるとそれは寝ぼけ眼の啓介で、晶子の喉から心臓にかけて何か冷たいものが突き抜けた。これから深呼吸なり何なりしようと思っていたのに。

「おはようございます！」

晶子は真面目くさった新入社員のような声をあげた。この前からウチの会社に入った派遣さんが丁度こんな感じだったな、そこまで考えて晶子は、欠勤してしまった自分に少しだけ罪悪感を覚えた。晶子の心臓は二つの意識に共有されて、とくん、と強く打った。

「ああ、おはようございます」

かすれた息を多大に含ませた声で啓介は答えた。こんな所で晶子と遭うなんて想像もしていなかっただろう。ここで驚き、そして焦るのは、啓介も同じなのかも知れない。――啓介さんも同じ？

「今日はお仕事休みなんですか？」

――『同じ』なのだとしたら、ひょっとして私達は『共犯者』だろうか。

「はい、ウチの職場、決まった休みが取れないんですよね」

「そうなんですか」

――よくわからないけど、ええい、共犯者だ。もし本当に『同じ』なら。晶子は回想する。もし同じなら、例えば昨日の夕方、啓介さ

んも私と同じように、私に会わない為にあの場所に来たのかも知れない。ではその後、二人はどうしたのだろうか。戸惑う啓介と、状況が飲み込めない龍太郎。晶子は微笑した。あんまり想像できないなあ。

啓介は当たり前のようにもう一度店内に入り、晶子はそれに付いて行くかたちで買い物に入った。店内で啓介がどうにも手持ちぶさたにしているので、晶子は適当なサンドイッチを一つ掴んで会計を済ませた。

「龍くんはお留守番ですか？」

ビニール袋を手に、ふと聞いてみる。

「いえ、さっき保育園に連れてきました。なんかどうしても行きたかったらしくて」

啓介は呆れたような笑いを見せる。ひそめた眉はどこか嬉しそうだ。

「お友達といる方が楽しいんですかね」

二人は店を出た。晶子は自分でも気付かないうちにサンドイッチの封を開けていて、二人は当たり前のようにごみ箱の隣りに立った。まだ目も完全に覚めきらない朝、その時間を誰かと一緒に過ごすと、何だかその人ととても親しくなったような気がする。修学旅行で同じ部屋になった友人しかり、『夜遊び』の翌朝、何故か隣りにいた男しかり。ぬるい陽気、寝ぼけた頭。晶子はいつしか啓介の腕を抱いていて、辺りには心地良い沈黙が流れた。

さて、この休日をどうしようか。

精算といっても、さて何をしようか。

啓介の思いのたけを聞き出すことはできるだろうか。考えるふりをしてみても、ぬるんだ脳は結論を導き出さない。今日は自堕落な女になってみようか。三人のことについていろいろと考えることが、今日これから数時間の予定を立てることが、晶子にはひどくおっくうに思えた。今日は適当に過ごそう。啓介さんも巻き添えにしちゃ

え。
「今日これから、何か予定とかありますか？」
「いえ。特には」
「じゃあ、ウチ来ません？」
訳の分からない女だ、寄ってみたり逃げてみたり。晶子は力ない笑いを浮かべる。自分が何を考えているのかもよく分からない。でも、今日はこれでいいのだ。
「じゃあ……お邪魔します」
ほら、やはり啓介も同じなのだから。

第十七話：今朝は二人でゆらゆらと（後書き）

最近疲れが取れません

第十八話：ママのおうちに来ませんか？

今まで、二人の間には当たり前のように龍太郎がいて、当たり前のようにそれ相応の距離があった。晶子は今まで二人の距離感など考えたこともなかったが、いざ足下がぽっかりと空いて、間をつめる余地ができてみると、どうしてずっと、こんなにも離れていたのだろうかと思う。ふとしたときに手が、肩が触れるなどということは、今までなかった。

腕を組むことはできても、手を繋ぐことができないのはどうしてだろうか。その方が二人の距離はとれる筈なのに。

何を今更、と思うだろうか。

二人でもと来た道を辿りながら晶子は急に、というよりもやっと、どうしても恥ずかしくなってしまったのだ。啓介が通ったことのないであろう道を案内する、今の晶子にはこれだけのことさえ小恥ずかしい。まるで自分の部屋を、自分自身の中を見られているような気がするのだ。この恥ずかしさは、一体どこから来るのだろうか。考え始めたのが先か、結論が出たのが先か、とにかく晶子は気付いた。

「これって、デートじゃん」

朝日と呼ぶにはいささか高く昇りすぎた太陽を右頬に感じて、晶子はごくうっすらと汗をかいた。

「ちょっと待ってて下さい！」

部屋のドアを開け、一人足を踏み入れ、慌てて背中でドアを閉めて、晶子は言った。まだ来客を迎え入れる準備などまるでできていない。

「あー、はい」

と心なしか少しだけ固い返事をした啓介をおいて、晶子は中に入った。

何でもかんでもテーブルの上に置いてしまうのは良くないことだと分かってはいても、良識というのは二十四時間働きつづけているものではない。
仕事帰りに郵便受けから持ってきたダイレクトメール、買ったときの紙袋の中に入ったままの文庫本、フロアモップの替えシート、普段使っている鞄等々。
食事をするスペースを除いて『きっちりと散らかった』それぞれをあるべき場所に、よく分からないものはとりあえず啓介が入ってくることはないであろうキッチンにまとめて、次にすべきことをモップをかけながら考える。リビングで他の片付けるべき所を、キッチンで紅茶バックの所在を、寝室でベッドの上をそれぞれ見ては片付けて、晶子は、よし、とモップを寝室の隅に立て掛けた。きっと『何が起こっても』どうにかなるだろう。

「お邪魔しまーす」
晶子がドアから首だけ出して合図をすると、廊下の手すりにもたれ、腹の前で指を組んでいた啓介がいそいそと入ってきた。晶子の緊張感はデートのそれのような、期末試験のそれのような複雑なものになって、続いてドアが閉まった。外と内が完全に分かたれて、晶子はいよいよか、と思った。

ここのところ、自分の考えていることがよく分からない。
啓介をテーブルに着かせ（玄関から遠い方が上座だったよね？）、料理用の鍋でお湯を沸かしながら、晶子は軽くのびをした。
最近なんだか、身体だけが先にどんどん動いていて、追いついた心が自分の身体のしたことに毎度毎度びっくりする感じ。水面に細かいうたかたがたって、キッチンがどうにも蒸し暑くなってきたところで、晶子はやっと換気扇を回していないことに、家中の窓を全く開けていなかったことに気付いた。大急ぎで換気扇のスイッチをつけて、それから小走りでキッチンを出た。

「ごめんなさい、暑いですよね」
「いえいえ、大丈夫です」
角部屋の恩恵を最大限に受けたリビングの窓を開けると、レースのカーテンがふわっ、とふくれた。キッチンではお湯の沸く暖かい音がする。

第十八話：ママのおうちに来ませんか？（後書き）

申し訳ないですが次回は休ませて下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5655a/

夜のコンビニに幼子は似合わない

2010年12月25日14時50分発行